

# 明日 への 話題

## 成長への挑戦



日本銀行  
副総裁

やまぐち ひろひで  
**山口 廣秀**

世界経済に少し明るさがみえてきた。欧州債務問題の極端なリスクはひとまず後退し、米国経済にも改善の動きがでてきている。もちろん、世界経済が、このまま順調な拡大軌道に戻っていくかどうかは不確実だ。欧州債務問題の根本的な解決には時間がかかる。米国の家計のバランスシート調整もなお途半ばだ。新興国のインフレ圧力は根強い。世界経済が抱えるこうした問題の多くは、2008年のリーマン・ショックに端を発している。ただ、問題を長い時間軸で大きくとらえれば、本格的なグローバル化時代をどう生きていくか、持続可能な成長モデルをどう築き上げていくか、という本質的な課題への各国の挑戦の結果だったと言える。

冷戦終結以降、市場経済が地球規模で広がり、情報技術の発展と相まって、国際分業の地平は拡大した。新興国を巻き込んだグローバルな競争は激化し、各国はそれぞれの比較優位を求めて挑戦を続けた。米国など一部の先進国は、新興国とのモノづくり競争に見切りをつけ、金融イノベーションを成長の柱のひとつに据えた。欧州は、通貨統合を軸とした経済活性化に活路を求めた。新興国は、外需主導の成長路線を進んだ。こうして各国は、選び取った戦略のもとで好循環を続け、世界は、2000年代半ばまで、膨らんだグローバル・マネーとともにインフレなき高成長を謳歌した。

今、リーマン・ショックや欧州債務問題を経て、各国は成長戦略の練り直しを迫られている。米国は金融に過度に依存しない付加価値の創出力を、欧州はより強固なガバナンスを伴う統合を、新興国は内需中心の経済構造を、それぞれ目指して進み始めているように見える。ただ、米国、欧州はともに負の遺産を引きずりながらの再挑戦であり、前進に弾みがつきにくい。新興国におけるインフレ圧力は、食糧、エネルギー、地球環境という根源的な制約とも関連しているだけに根深い。

さて、わが国はどうか。20年前のバブルの後遺症と高齢化の進展で、企業の成長期待は伸び悩み、新しい成長モデル構築への取組みは遅れた。しかし、そろそろ動きだすべき時だ。わが国の金融システムは、リーマン・ショック後も安定している。製造業、非製造業を問わず、イノベーションの芽は随所にみられる。これらは、米欧との対比でみても、大きな強みだ。この強みと豊富な金融資産を活かしながら、今度は世界に先駆けて、21世紀版の確たる成長モデルの構築に挑戦する番ではないか。